

ハンドボール競技における左バックポジションを突破する1対1のフェイント動作

—国内選手を対象にして—

八巻 雄一 (201012063、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：学生レベル、日本リーグレベル、1：1の突破

【目的】

本研究では、学生レベル、日本リーグレベルの男子ハンドボールにおける右利き左バックコートプレーヤー、いわゆる「右利きエース」を対象に、どのようなフェイントを使い1：1を突破し、シュート達成に至っているのかを明らかにし、各レベルの特徴と傾向を比較して、有効な1：1突破プレーを明らかにすること、自身のこれからの競技生活に生かせる提言を得ることを目的とした。

【方法】

学生レベルでは、2013年関東学生ハンドボール男子春季リーグ110場面、日本リーグレベルでは2009～2010年日本ハンドボールリーグ98場面を研究対象とした。分析項目は、ボールをもらう前の位置取り、ボールをもらう前の高さ、ボールをもらう前のスピード、動き方のパターン、ボールをもらった時の位置、DFとの位置関係、DFの高さ、間合い、フェイントの種類、突破方向、歩数、フェイント前後のドリブル、相手DFの対応、プレー結果である。統計処理には χ^2 検定と残差分析を用いた。

【結果】

本研究の結果以下の7点が明らかになった。

- (1) ボールをもらう前の位置取り、ボールをもらう前の高さ、ボールをもらう前のスピード、動き方のパターン、DFとの位置関係、DFの高さ、突破方向、フェイント後のドリブルについては、学生と日本リーグとの間で差はなく、プレー結果とも関連性はない。
- (2) ボールをもらった時の位置については、学生、日本リーグともに真ん中でももらうことが多いが、日本リーグは学生に比べてアウトでも多くもらっている。しかし、プレー結果との間には関連がない。
- (3) フェイントの種類については、学生は0・1ステップを多く使い、日本リーグは0ステップを多く使っている。しかし、いずれもプレー結果との間に関連はない。
- (4) 間合いについては、学生、日本リーグとの間で生起数に差はないが、プレー結果に差があった。学生、日本リーグともに間合いが近いと有効でない1：1になりやすく、学生は中間、日本リーグは遠い

と有効な1：1になりやすい。

(5) 歩数については、学生、日本リーグとの間で生起数に差はないが、プレー結果に差があった。学生は2歩、日本リーグも1～2歩使うとパスが多くなり、どちらも3歩使うとパスすることが少ない。

(6) フェイント前のドリブルについては、学生、日本リーグとの間で生起数に差はないが、プレー結果に差があった。日本リーグではドリブルをするとパスは少なくなり、しないとパスが多くなる。

(7) DFの対応については、学生、日本リーグとの間で生起数に差はないが、プレー結果に差があった(表1)。学生はDFがつめると有効な1：1になりやすく、下がると有効な1：1になりやすい。

【考察と実践への提言】

これらの結果から学生レベルの選手の競技力の向上のためには、フェイントをかける前は、特にアウトでボールをもらう意識を増やすこと、自分の間合いが作れなかった場合はフェイントの前にワンドリブルを使うこと、DFが下がる対応をしてくるときは、積極的に1：1を仕掛けていくことが示唆された。

フェイントを仕掛けた後は2歩または3歩しっかりと使うことで、相手DFの状況が変わる。したがって、2歩または3歩使いながら相手DFを観察し、シュートまたはパスを選択するべきである。特に2歩目の時は、相手DFにあまり守られないので、シュートを積極的に狙いにいくべきである。

表1 DFの対応と結果2のクロス表

	学生レベル			日本リーグレベル		
	有効な1:1	有効でない1:1	パス	有効な1:1	有効でない1:1	パス
つめ	3(5.5%)	5(21.7%)#	1(3.1%)	4(10.0%)	5(21.7%)	3(8.6%)
そのまま	34(61.8%)	16(69.6%)	24(75.0%)	27(67.5%)	15(65.2%)	23(65.7%)
下がる	18(32.7%)#	2(8.7%)*	7(21.9%)	9(22.5%)	3(13.0%)	9(25.7%)
合計	55(100%)	23(100%)	32(100%)	40(100%)	23(100%)	35(100%)

カイ2乗値=11.159, p<0.05

カイ2乗値=3.334, ns

#残差分析の結果有意に大きい

*残差分析の結果有意に小さい